TOP Interview
トップインタビュー
第4回

国立大学法人福島大学

創造的混乱・大学改革と福島大学の挑戦

福島大学 学長
三浦 浩喜

聞き手／矢吹光一
一般財団法人とうほう地域総合研究所 理事長

今回は、福島大学三浦学長を訪ね、ご自身の生い立ちから教育者を目指されたきっかけや、研究者から学長へ至る経緯についてお話を伺いました。

1．三浦学長のご経歴について

矢吹　先生のご実家は酪農を営まれていたとのことですが、幼少期にはどのようなことを考えていらっしゃったのでしょうか。

三浦　私は福島県の山間部で酪農を営む農家に生まれました。子供の頃は体が弱く、農家の仕事が嫌いでした。父親は自分の息子を農家の跡継ぎにすることしか考えていなかったですね。それが嫌で地元の公立高校へ進学し、その後、我儘を言って福島大学へ進学させてもらいました。実家は祖父を早く亡くし祖母が１人で家計を支えた時期があり、経済的に厳しい家庭で、父親も弟（叔父）を高校へ進学させるため、自分が高校を中退して就農していたほどでした。ただ、父親は自分の子どもに対して日頃から、やりたいことはやりなさいと言っていた手前、大学受験を許してくれました。つい最近、わかった話ですが、父親は私が国立の４年制大学に受かると全く思っていなかったらしく、合格した後でこれは大変なことになったと大慌てだったようです。

私自身は凄いチャンスを得たと思って、本気で勉強し本気で制作（彫刻をつくったり、絵を描いたり）しました。１年365日の内、360日くらいは、朝７時30分から夜10時30分の最終電車まで大学にいました。大学を120％くらい使って卒業したという感じです。

矢吹　私も農家の長男ですが、親としてはやっぱり長男は継承して欲しいという思いがあって、それを言わなかったお父さんは凄いですね。

三浦　農業を継げと言われていましたが、私は中学生の時に脚の骨に腫瘍が見つかって、手術をして半年くらい学校を休んだこともありました。内心、これで農業をやらなくて済むと思いましたが、父親はそれでも息子と農業をやりたかったのだと思います。その昔、父親は阿武隈山麓を酪農基地に改造することを目指す農業青年の中心人物だったようで、この一帯を出稼ぎをせず農業だけで食べていけるような地域に変えたいという高い理想を持っていました。だから、父親からみれば、息子にはどうしても農業を継いで欲しかった訳です。

2．教育理念について

矢吹　私が育った地域も先生になるということが名誉なことで、親族に先生がいることが誇らしい地域でした。三浦学長は、先生になられて何年教鞭を取られたのですか。

三浦　学校現場の先生は11年でした。教員になってから派遣で２年間大学院に行かせてもらったので、給料をもらいながら勉強した期間を含めれば13年です。今から40年前の採用時は校内暴力が全盛の時代で、

初任地の中学校も大変でした。大学４年間しっかりと教育学を勉強し実技も身につけたにもかかわらず、そもそも生徒が教室に入らず外で遊んでいる状況でした。彼らに何かしら強く指導すると、もう物凄い勢いで歯向かってきて、普通に殴りかかってきましたから、毎日学校に殴られに行っているような感じでした。真面目な話、最初の１年間は体から青あざが絶えませんでした。

矢吹　**その頃は、23歳くらいですね。**

三浦　そうです。今思えばよく精神的に持ちこたえたなと思います。大学で勉強したことが全く役に立たない１年間を送ったことが、私のリアリティショックでした。しかし、そこからまた本気で教育学を勉強し直して、どうしたら荒れる生徒達を指導できるようになるのかということを365日24時間考え続けるような日々を送るようになります。徐々に学校のヤンキー達とまともに話ができるようになり、彼らを集団的な活動の中にどうしたら引き戻せるのかということを考えるようになりました。結果的に初任地に６年間勤務して後半３年間は生徒指導主事を任されました。それこそ、有名問題校の生徒指導主事を新採４年目の若造だった私が担当したのです。私は美術の教員なので全校生で壁画を作ろうとか、全くできなかった合唱コンクールを再生しようとか、演劇を上演しようとか、そういう文化的な活動を通じて子供達のエネルギーを正しい方向へ発散させたいと考えるようになりました。その私の考え方を若い先生方がとてもよく理解してくれて、それをベテランの先生方も支えてくれました。その結果、学校を挙げて、文化祭などの文化活動に力を入れるようになり、生徒たちも落ち着きを取り戻し、６年間で学校が立ち直っていく姿を私自身が目の当たりにし、40年経た今でもその経験が私を支える柱になっていると言えます。まず、気が付いた人が何か知恵を絞って、見通しを持って実践して、周りを巻き込めば、組織が変わるということを、教育現場で身をもって体験できて、それが自分の根幹を支えている一番の価値観なのかなという気がします。

矢吹　**なるほど、今のお話は凄く興味深いですね。文化的な心は、学校のみならず企業経営においても大事なことです。基本的に人の心を豊かにすることが、荒れた学校を大きく変えていく力になるとともに、そこから生まれる包摂力というものが何かを変えていく力になるということは、素晴らしいことですね。そういうことに３年で気が付かれたのですか。**

三浦　そうですね、但し今はそういう学校の文化活動は、働き方改革とか多忙化解消のために一番初めに削られていく領域です。学校の中から子供達が学校を自分達の社会としてとらえ、生きていくような場が奪われています。学力向上だけに大きく傾斜した学校に作り変えられているとしたら、それが先生にとっても子供達にとっても非常にマイナスだと思います。

矢吹　**先日、大熊町の「学び舎ゆめの森」へ行って、増子副校長先生とお話させていただいて感じたのですが、今我々に求められているのは、如何に的確に回答するかというアウトプット型よりも、しっかり自分で考えようとする人達がもっと必要だということです。文化的な心から勇気が湧き、日本フィル**

ハーモニー交響楽団の平井理事長もお話しされていましたが（福島の進路２月号掲載）、人と人が寄り添い合って接することで、心が通い合い、人が成長する訳です。先生から見て、それは大事なことでしょうか。

三浦　私は、広い意味で文化を通して社会が形成されるということが本質だと思っています。誰かに社会を作りなさいと言えば社会ができる訳ではなく、一つの問題や課題にみんなで取り組む、協力する事実があって社会が作られるのです。小中学生が自分達のクラスの団結力を高める、そのために文化的な行事に取組もうとすると、その中で色々なことが起きます。クラスメイトの中に言うことを聞かない子やさぼっている子や個人的事情がある子がいて、それらの問題を自分達で解決していくことによって、文化活動を完成させる以上に大切なものができる。それが、学校の本来の機能だと思っていて、学校は成績や成果を上げるためだけにあるのではないのです。

矢吹　不透明で先が見えない時代にあって、どうやって持続可能な企業や社会を作っていくかという話になると、おっしゃる通りだと思います。組織が変わっていく様を見て、それが自分の根幹になったとお話しされましたが、３年間生徒指導主事をされた中で得られたものが今に脈々と生きている訳ですね。

三浦　そうですね、20代前半といいますか、その頃の体験が社会人のスタートだったということが、私にとって運命を決定づける出来事になりました。

矢吹　そういうことがおありになって、今の学長を形作られている。目の前に困難や不具合や社会的義憤のようなものがあることは、人が次のステップに進むために大事なことでしょうか。

三浦　そうですね、全校から問題視されていたヤンキー連中が全校生徒の鏡とは言わないけれど、ある場面では輪の中心になってリーダーシップを発揮する姿に変わっていきました。学齢期の子供達というのは失敗をどんどん繰り返して立派な人間に成長していかなくてはいけない。そういう問題児と言われる子供たちを如何に学校から排除するかとか、子供たちがみんなで知恵を絞って考えるべき現実の問題を如何に不可視するかとか、そういう方向に向かっている状況は、実に疑問を感じています。

矢吹　何かを詰め込んで知識をアウトプットすることはできても、自分で考えるということがなかなかできなくなっていますね。今までのように過去の延長に未来がある時代はいいと思いますが、これからは過去の延長に未来を描けなくなっています。戦争だとかパンデミックだとか気候変動もありますし、そういう中で一番大事なのは自分達のことを自分達のこととして考えて動くことですね。

三浦　まさにそうですね。

3．学内連携と人材活性化について

矢吹　そういう意味では、福島大学も変革の過渡期にあるのですね。色々な改革の中で変えなくてはいけないことと、変えてはいけないことがあるでしょうし、学長が目指す大学の姿についてお話いただけないでしょうか。

三浦　私の主観ですが、福島大学は震災前にいったい何をやっていたのだろうかと思うくらい、震災後の取組みは大学にとって決定的でした。今の福島大学を説明する上でも、震災後の取組みが前提になると思います。震災以降、地域と連携する震災復興プロジェクトが動き始めたことにより、地域の中で機能する大学として、公私ともに認められるようになったと思っています。

震災後、復興支援センターである「うつくしまふくしま未来支援センター」が設置されて、原発事故への対応のため「環境放射能研究所」が設置されました。その後、農業の復興を目的に「食農学類」が創設され、色々な組織が外付けでできて、いずれも大きな成果を上げて福島大学を象徴する機能になりました。ただ、流石に12年経つと復興予算もほとんど下りてこなくなるので、大学の機能を取捨選択する必要が生じました。それが、私の学長の任期と重なって、組織統合を含めた改革をするタイミングになった訳です。

福島大学は食農学類ができて計５学類（学部）になりましたが、一連の復興の取組みは、残念ながらほぼ学類の外で進められたという問題があります。もちろん教員の個人研究や学生達の自主的な活動が復興に尽力したことは間違いないですが、それぞれの学類の教育としてこれからの地域のあり方にどうコミットするのかというところに弱さを感じています。そこが私は一番の課題と思っています。いわば、オプションとして作った様々な活動を学類の中にどのように埋め戻していくかということが、私の一番の問題意識です。

2022年４月「うつくしまふくしま未来支援センター」と「地域創造支援センター」を統合して「地域未来デザインセンター」を作り、2023年４月大学院の改革を行いました。今は大学改革の本丸と位置付

けている学類の改革（学士課程のリニューアル）を進めるべく喧々諤々と議論している最中です。

矢吹　**学士課程のリニューアルは具体的にはどのような内容ですか。**

三浦　財政的にも非常に厳しくなっている上に、福島大学は過去に作った様々な研究分野がそのまま残っているので、時代のニーズに合わせて研究分野の重点化を進める必要があります。今の社会において、デパート型店舗は不人気ですが、ユニクロ等の専門店が人気を得ているように。勿論、それをそのまま大学に置き換えようとは考えていませんが、講座はあるものの内容が薄くては、これからの社会の中で機能できない。探究活動をしている高校生が求める教育レベルというものは、そんなところではないと思っています。だからやっぱり研究分野を絞り込みながら、それぞれのカリキュラムを強くするということが、何より重要です。

矢吹　**私も、この10年間、福島大学の存在感の高まりを感じていて、さらに地域の復興を果たすため、大学の機能の中に位置づけるというお話をお聞きして、そういうことなのかと理解できました。今日、取材した内容を地域で起業している経営者に福島大学と一緒にやりませんかと発信したいですね。**

三浦　それは、むしろ私たちの方が望んでいるところです。研究連携や交流では、2024年４月に水素エネルギー総合研究所を立ち上げる準備中です。全国的にみれば今から水素エネルギー研究を始めるのは遅いですが、福島県の場合森林資源が豊富で、そこから産出されるバイオマス燃料を炭化させて水素を抽出し、それを地域の中で消費するというエネルギーの地産地消ができないかと考えています。福島県に合ったエネルギー生産のあり方を考える一つのツールにしたいと思っています。

矢吹　**福島県内の豊富な森林資源はもっと活用されるべきですね。エフレイの山崎理事長も福島大学と徐々にプロジェクトを進めていると話していました。**

三浦　エフレイにはグローバルレベルの研究力が求められていますが、一方で被災地の地域課題の解決を図るという役割もあり、その二つの役割を同時に進めていかなければならないと思います。山崎理事長とは度々意見交換を行っていて、エフレイ設立当初から地元大学として地域復興の取組みは外せないので、そこに立脚した形で参画したいと話しています。
本学には世界レベルの研究は少ないのですが、それでも一定の研究プロジェクトを採択していただいたということは、エフレイは震災復興や地元の活動にしっかり向き合っているという意識の表れだろうと思います。

矢吹　**エフレイも地域に受け入れられたいという意識を持っていると思いますが、一般の方がエフレイについ**

て体系立てて学ぶ機会はあまりないですね。そういう意味でも、エフレイのことを伝えていくことも私共の仕事だろうと思います。

4．地域連携と大学改革について

矢吹　福島大学は、相当多彩な取組みをやられていますが、それを理解して、学長として意思決定するということを、どのように学ばれて、様々な課題に向き合っているのでしょうか。

三浦　どれだけ困難があっても今大学を変えていかなければ、これからの18歳人口の減少や国の高等教育政策等に耐えられないと思っています。また、大学が地域の中に溶け込んでいては何のための大学かわからなくなるので絶対駄目だと思っています。特に国立大学は地域に対して常に問題を提案できるような、次代の地域の形を提案できるような機能を持っていなければいけない。地域と密接な関係を保ちつつも、常に研究的な視点を持ち、一歩先を行く様々な問題意識を持ち続けることが大学としての存在意義だと思います。それが、教員個人や研究者集団としてだけではなく、全学として常に地域に対して新しい問題提起を行っていけるような大学でないと、おそらく生き残れないだろうと思います。18歳人口減少とは言いながら、国立大学なのでしばらくの間、それなりに受験生は集まると思いますが、そこに甘えていたら、ある日突然とんでもないことがやってくるでしょう。国立大学としての足腰の強さを今のうちにしっかり作り直しておくという使命感だけは、ものすごく強く持っています。

矢吹　大学は研究機関であるとともにオピニオンリーダーにならないといけない。私達とうほう地域総研もそうですが、同じような組織や団体が予定調和的に仲良くするだけでは、化学反応は起きないので、本当の変革はできないと思います。

三浦　「創造的混乱」という言葉をよく使うのですが、物事の道理として量的蓄積から質的変化に変わらなくてはいけない時期があり、今まさにそういう時代だと思います。間違いなく人口減少はやってきます。右肩上がりの昭和・平成型の価値観ではなくて、人口減少社会の中でも希望を持ち、前向きに生きられるというライフスタイルを今のうちに形作りたいと思います。

矢吹　本当ですね。人口減少ですが、統計データでは福島県の人口はピークの213万人から、現在175万人くらいになって、2040年には140万人台まで減少する予想です。人口減少は社会や経済の縮小を意味するため、そういう中でも経済をしっかり育まなければ、子供達の働く場もなくなります。

次に、福島大学卒業生のネットワークについてですが、OB、OG の中にはいずれ福島の役に立ちたいと

いう思いや、寄附等により応援したいという思いを抱いている方々が沢山いらっしゃると思います。そういう方々は必ずしも大学と連携されたり、組織化されている訳ではないと思いますが、同窓会等に対する大学としての取組みについて教えてください。

三浦　これまでは、学部ごとに同窓会があり、特に古くからある教育学部・人間発達文化学類は「同窓吾峰会」、経済学部・経済経営学類は「信陵同窓会」として活動しています。それぞれ歴史のある同窓会で多数の卒業生が所属して、外から大学運営を支えていただいていますが、その資源を共有するため「校友会」という形に統合しました。実は、同窓会活動は圧倒的に旧校舎（浜田町と森合町）時代の OB が主役で、金谷川キャンパスに移転してからは、なかなか同窓会を支えるネットワークが育たない悩みがあります。そこのところを今ある資源を含めていかに活用できるか、考えている最中です。

矢吹　**学生の進路や就職先には、当然東京志向があると思いますが、福島県内にどういう会社があって、どんな事業をやっているのかということを、我々産業界はもっと伝えていくべきです。学生の中には、大企業一辺倒ではなく自分のやりたいことや、社会課題の解決ができる会社を選んで、人生を有意義に過ごしたいと考える学生もいる訳で、情報発信が必要です。卒業後、一旦東京へ就職しても、卒業生 LINE 等でデジタルに繋がりたいですね。**

三浦　確かにネットワークは大切ですが、ネットワークを作る原点は、学生たちの大学体験にある訳で、金谷川キャンパスで能動的に勉強やサークル活動、アルバイトを体験したことで大学に対する愛着が生まれると思います。ところが、大学に対してあっさりした付き合いをする学生が増えているように思います。昔話ですが、私が学生の頃は、この地域にアパートが無かったこともあって、学生が夜遅くまで大学で勉強やサークル活動をしていましたが、今はそういう感じではないですね。せっかくこれだけの施設がある訳ですから、もっと自分のために活用して、それが結果的に大学を盛り上げるようになってもらいたいです。

矢吹　**学長がさっきおっしゃっていた、ご自身の学生時代は朝から晩まで夢中で勉強したということは素晴らしい体験ですね。クリエイティブな気持ちを養うことを含めて、多様な色々なことを学ぶのは大学でしかできないと思います。**

三浦　我々の頃は、大学時代は文学や哲学に目覚める時期だと言われましたが、私は自然に哲学書等を読みました。本の内容を全て理解した訳ではなかったですが、学生であればそういう本を読んで考えることが当たり前だと思っていましたので。古き良き時代の学生文化かもしれません。

5．メッセージ

矢吹　**最後の質問ですが、大学は事務職員から教員まで様々な人達がいて、これを一つにまとめることは難しいのではないでしょうか。**

三浦　それは難しいですね。学長になって初めて見える景色が沢山ありました。私は副学長を６年間経験して、大学の運営についてはある程度分かっていたつもりでいましたが、副学長と学長とでは全然違いました。一見平穏に上手くいっているようなところでも色んな問題があります。あらゆる情報が私のところに上がってきて、「さあ困ったな」という難題を毎日処理しています。私は元々学校の教員でしたから、とにかく実践型で、できるだけ事務職員とも一緒に仕事をしなくてはいけないと思っていました。美術の専門なのでディスプレイも簡単に作れますから、人手が足りない時は、人知れず、代わりに制作を手伝ったりしています。

矢吹　**ディスプレイ制作とも関係があるのかもしれませんが、ストレス解消法に何か取り組まれていらっしゃいますか。**

三浦　元々彫刻やグラフィックをやっていましたので、３Ｄソフトで現代アートっぽくモデリングして３Ｄプリンターで印刷して、作品をプレゼントしたりしています。３Ｄスキャナで立体物をスキャンしたり、VR 空間でのモデリングも試行中です。学生より先に行かなければという思いです。

矢吹　絶えずご自身の知的好奇心と向き合うように取組まれていますね。

三浦　学生たちを如何に驚かせるかということが楽しみの一つです。こんなことも学長がやるということを見せて驚かせる訳です。

矢吹　長時間のインタビューにお付き合いいただきありがとうございました。

※編注：文中に登場する企業名は敬称を省略しました。

トップインタビューを終えて

三浦学長と初めてお会いし、是非一度じっくりとお話を伺いたいと思った。それは、穏やかな風貌の中に、時おり垣間見える、教育者としての矜持と強い変革への意欲を感じたからである。お話を聞く中で、それは確信に変化した。三浦学長は、福島の未来のために、変革者として、トップリーダーとして、福島大学ひいては福島の教育を変えようとしている。あくなき挑戦への覚悟を持っておられる。その根底を支えているのは、中学生時代の脚の骨の腫瘍、４か月間の入院生活、死生観、自分自身で深く考えることなどの原体験にあると感じた。大震災直後に福島大学の学生は、自らの生活もままならない中、子ども支援のボランティアなど様々な被災者支援を行ってきた。卒業式もなくなり、それでも大学の避難所を必死に運営していた学生たちの姿を忘れられず、今思い出しても涙が流れるとおっしゃる。その学生の姿は、大震災・原発事故という中での特別な姿ではなく、普段は見えない、若者たちの本当の姿、ポテンシャルであると言われ、学生たちへの信頼と思いやりが見えた。今の学生、若者へのメッセージとして「状況の変化に負けることなく、変化を受けるだけの側ではなく、状況を変える側の人間になってもらいたい。」と話された言葉の中に、「人」という「希望の種」を教育という無限の力で育て続けるという強い決意と凄みを感じた。福島大学のより一層の成長、地域支援のために、私どもも自分事として取組みたいと強く決意した次第である。

（インタビュー　矢吹光一）

当研究所：矢吹理事長（左）
福島大学：三浦学長（右）